

大学生の「いじめ」認識についての考察

－教育の基礎的理解に関する科目「教職入門」の授業分析を中心に－

The Awareness of Bullying among University Students : Focusing on The Analysis of University Lectures as Basic Subjects of Education, “Kyoshoku – Nyumon”

山本和久 (Kazuhisa YAMAMOTO)

はじめに

2017年の5月下旬から6月初め、「教職入門」の講座において「いじめ」をテーマに授業を進めていた頃、茨城県取手市で2015年11月に「いじめられたくない」と日記に書き残して自殺した取手市立中学三年の中島菜保子さんのニュースが連日新聞・テレビで報じられていた。筆者の授業においてもこの問題はその都度取り上げたが、この問題に対して、市の教育委員会は「いじめの事実は確認できなかった」として、2016年3月、いじめ防止対策措置法に基づいた「重大事態」に該当しないと議決したが、2017年5月30日の教育委員会臨時会で、「いじめによる重大事態に該当しない」との議決を撤回し、遺族への配慮に欠けたものだったと謝罪したというものである。更に、これまで「いじめの事実は確認できなかった」と一貫して主張してきたが、一転して、自殺との関係はわからないものの、当該女子生徒が悪口を言われるなど、「現在はいじめはあったと認識している」と認め、釈明した。

2017年6月1日付の中日新聞には、

「市教委は15年12月、同級生全員にアンケートや聞き取りをして『いじめの事実は確認できなかった』との調査結果をまとめた。だが、父孝宜さんと母淳子さんが同級生20人から話を聞くと、いじめを裏付ける証言が次々に出たという。両親の求めで市教委はその後、第三者委員会を設置。両親は委員から聞き取りを受けたが、家族問題やピアノの悩みに関する質問ばかりで、家庭や本人の問題を探しているようだったという。『私達の気持ちや、菜保子の思いを踏みにじられた』とまた傷ついた。『隠蔽させない』と決意して今年三月、菜保子さんの実名を公表した。」

と、ご両親の苦しい胸の内が語られていた。

残念ながら、この事件の経過からも学校関係者及び教育委員会関係者の隠蔽体質、責任転嫁、そして、いじめ問題に対する絶望的な鈍感さを感じ取れてしまう。しかし、この問題については、ひとまず等閑にしておく。本稿で問題とするのは、将来教職を目指して学んでいる大学生は、学校教育現場で起こっているこの「いじめ問題」をどのように認識しているのかという点である。具体的には、学校教育現場において

- ・「なぜ、いじめは起こるのか」
- ・「いじめがなくなる原因はどこにあるのか」
- ・「教師として、自分はどのようにいじめと向き合うのか」
- ・「いじめはどうすれば解決できるのか」

等の明確な解答がない教育課題について、どのような認識をもっているのかを、授業における個人アンケート及びグループディスカッション・グループワークによって学生たちが導き出した回答を分析することにより明らかにすることである。

1 2017年度の授業の進行

1.1 授業のねらいと構想

本講義では、教員という職業がどのような意義をもっているのか、学校での教師の職務と役割がどのようなものであるかを、学生の被教育体験を生かしながら学び、教育への関心や教職に対する情熱・使命感を高めるとともに、教員としての適性を省察する契機とすることをその目的とする。また、「学校のいま」と、子ども達と共に生きる「教師の困難と希望」について伝え、これからの学校と教育の課題を学び合い、語り合うことを通して、自らが目指す教師像を作り上げていく契機とする。更に、学校が担う役割が拡大・多様化する中で、学校内外の専門家等と連携・分担して対応する必要性について理解する機会とした。

実際の授業においては、講座担当教員である筆者からの一方的な講義形式ではなく、毎時間テーマを与え、小グループによるグループディスカッション、グループワーク等を出来る限り授業に取り入れた。また、授業の最後に各グループで話し合った内容を交流する場を設定し、自分とは違う考え方があることを知ることにより、現在学校で起こっている様々な教育課題について複数の視点から問題を捉える機会となるよう授業を組織した。また、「体罰」について考える授業に於いては、「体罰容認派」と「体罰反対派」とに分かれてディベートを行うなど、次期学習指導要領においても重視されているアクティブ・ラーニングを意図的に多く取り入れ、受講学生の能動的な学修への参加を期待した。

1.2 主な授業の進行

2017年度の「教職入門」の講義は、概ね次のような内容で実施した。

回数	授業内容
第1回	オリエンテーション 他者理解のためのエンカウンター演習 / 次回授業のためのアンケート①
第2回	目的別学級遊び演習① (講義)「学んだことのたった一つの証は変わる事」林 竹二に学ぶ / 次回授業のためのアンケート②

第3回	<p>目的別学級遊び演習②</p> <p>教科指導「勉強は何のために」グループディスカッション</p> <p>(テーマ)「2015年度のPISA型学力調査の日本の結果(全参加国中)は、「科学的リテラシー2位」「読解力8位」「数学的リテラシー2位」となっています。一方、「学習への興味・関心」や「将来的に役に立つと思うか」という調査結果は、いずれも最下位グループでした。あなたは、この調査結果をどのように受け止めますか。また、「学習への興味・関心」や「将来的に役に立つと思うか」という児童生徒の意識を高めるためには、どのようにすればよいと思いますか。」 / 次回授業のためのアンケート③</p>
第4回	<p>目的別学級遊び演習③</p> <p>生徒指導「登校拒否・不登校」の問題から考えること</p> <p>グループディスカッション</p> <p>(テーマ)「平成25年度の小学校・中学校の不登校児童生徒数は119,617人でした。(文部科学省データ)これは、小学校では278人に一人、中学校では37人に一人の割合になります。その原因としては、病気、いじめ、学校不適應、経済的理由、その他(保護者の考え等)など様々考えられますが、みなさんのアンケートにもあったように、『学校』や『教師』が努力し変わることによって、不登校児童生徒も減少していくのではないかと考えます。あなたは、不登校児童生徒を減らすために、どのような『教師』が必要とされると思いますか。また、『学校』は、どう変わるべきだと考えますか。」 / 次回授業のためのアンケート④</p>
第5回	<p>目的別学級遊び演習④</p> <p>生徒指導「いじめ」問題から考えること(1)【いじめの原因を探る】</p> <p>グループディスカッション</p> <p>(テーマ)「滋賀県大津市内の中学校における「いじめ自殺事件」以来、全国の学校では「いじめに関するアンケート」等を実施したことにより、いじめ認知件数の数値は増加しました。しかし、現在も誰にも気づいてもらえずいじめに苦しんでいる児童生徒はたくさんいます。そして、その苦しさから逃れるために「死」を選んでしまう児童生徒もいます。あなたは、「いじめに気づく」という点において、現在の学校や教師には何が足りないと思いますか。また、あなたならいじめに気づくために、どのようなことをしますか。」 / 次回授業のためのアンケート⑤</p>
第6回	<p>生徒指導「いじめ」問題から考えること(2)【いじめの解決方法を探る】</p> <p>グループワーク(KJ法によりグループの意見を整理する)</p> <p>(テーマ)「平成26年度の文科省調査によると、いじめの認知件数は、小学校で11,413校(55.5%)、中学校で7,161校(67.5%)でした。将来あなたが教師になって、自分の学級に「いじめられている児童」がいることに気づいた時、あなたはその「いじめ問題」を解決するために、どのように対応しますか。」</p>

第7回	生徒指導「いじめ」問題から考えること(3)【いじめの解決方法を探る】 グループワーク(KJ法によりグループの意見を整理し、発表する) (テーマ)「第6回に続く」 / 次回授業のためのアンケート⑥
第8回	生徒指導「体罰」問題について考える ディベート(「体罰容認派」と「体罰反対派」に分かれて行う) / 次回授業のためのアンケート⑦
第9回	目的別学級遊び演習⑤ (講義) インクルーシブ教育「多様な子ども達が共に学ぶ」ことの意味 VTR「神様の忘れもの」視聴(IBC放送制作) 特別支援教育コーディネーターの役割 【第8回のアンケート内容】 「現在、学校教育現場では、「インクルーシブ教育」が推進されています。インクルーシブ教育とは、障がいのある子どもを含む全ての子どもに対して、子ども一人一人のニーズに合った適切な教育的支援を、「通常の学級において」行う教育のことである。 ①あなたは、障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に学ぶ意味は何だと思えますか。 ②通常の学級では、ADHD(注意欠陥多動性障がい)等の発達障がいをもつ子どもがいることにより、授業が騒がしくなり落ち着いた雰囲気での学習が出来なくなるようなケースも報告されています。あなたは、発達障がいをもつ子どもも通常の学級と一緒に学ぶべきだと思いますか。それとも、発達障がいをもつ子どもは、別の教室(あるいは学級)で個別に指導した方がよいと思えますか。」 / 次回授業のためのアンケート⑧
第10回	目的別学級遊び演習⑥ (講義)「教員の服務上及び身分上の義務と身分保障」 【第9回のアンケート内容】 「経済協力開発機構(OECD)が公表した「国際教員指導環境調査」によると、日本の教員の忙しさが浮き彫りになった。調査結果によると、参加国・地域の教員の平均勤務時間は週38,3時間。日本の教員は平均の1,4倍に当たる週53,9時間だった。特に、中学校における部活動などの「課外活動の指導」は7,7時間で、平均(2,1時間)の3倍以上。書類作りなど「一般的事務作業」も5,5時間で、平均(2,9時間)を大きく上回っている。半面、「指導(授業)に使った時間」は、平均を下回っている。あなたは、日本の教員の現状をどのように捉えていますか。」 / 次回授業のためのアンケート⑨
第11回	目的別学級遊び演習⑦ (講義及び教員採用試験問題演習)「教育法規」

	<p>【第 10 回のアンケート内容】</p> <p>「地方公務員法第 35 条『職務に専念する義務』には、『職員は、法律または条令に特別の定がある場合を除く外、その勤務時間及び職務上の注意力の全てをその職務遂行のために用い、当該地方公共団体がなすべき責を有する職務にのみ従事しなければならない。』と規定されています。ところで、ある教育長は研修会で『教員は 24 時間教員であるべきである。』と話しました。教員の不祥事が続く昨今の現状を鑑みての発言であったのかと思われますが、あなたは『教員は 24 時間教員であるべき』と考えますか。それとも、その必要はないと考えますか。」</p> <p style="text-align: right;">/ 次回授業のためのアンケート⑩</p>
第 12 回	<p>目的別学級遊び演習⑧</p> <p>(講義及び教員採用試験問題演習)「教育史」</p> <p>【第 11 回のアンケート内容】</p> <p>「教育・福祉の思想」にとって、最も重要な人物の一人であるエレン・ケイ(Ellen Kei、1849-1926)は、その代表作『児童の世紀』において、次のように述べている。『教育の最大の秘訣は、教育しないことである。』また、体罰について批判する代わりに、次のような例を挙げている。『危険については、もし子どもにあらかじめ恐ろしいことを知らせておきたいのなら、そのもの自体の恐ろしさを体験させなければならない。なぜなら、たとえ母親が蠟燭に触れたからといって子どもをぶっても、母親の留守の時に子どもは蠟燭に触れるであろう。しかし、子どもに蠟燭の熱さを思い知らせておけば、後で触れるようなことはしない。』(小野寺 信訳)^(注1) 子どもに焦点を当てるのではなく、子どもが焦点を合わせているものに大人も共に関与する。あなたは、エレン・ケイのこの言葉をどのように受け止めますか。」</p>
第 13 回	<p>目的別学級遊び演習⑨</p> <p>(講義) 次期学習指導要領より教科となる「道徳教育」について</p> <p>VTR「木を植えた男」視聴^(注2)</p> <p style="text-align: right;">/ 次回授業の為のアンケート⑪</p>
第 14 回	<p>教員採用試験の現状①</p> <p>教員採用試験集団面接演習 (全受講生対象：前半)</p> <p>(講義) 今日の学校と教育の課題</p>
第 15 回	<p>教員採用試験の現状②</p> <p>教員採用試験集団面接演習 (全受講生対象：後半)</p> <p>(講義) 目指す教師像・求められている教師像</p>

各回の授業においては、毎回前時の授業の最後に次回授業の内容に関わるアンケートを実施し、そのアンケートの内容を踏まえて授業を行った。そのように授業を構成することにより、受講生が自分と関わりをもって授業に臨むことが出来ると考えたからである。た

だ、アンケート内容については、授業で紹介してもよいものと紹介して欲しくないものがあると思われたので、アンケート用紙に授業での紹介の可否を記入する欄を設け、受講生が各自の考えをより自由に記述出来るよう配慮した。

2 大学生の「いじめ」認識の考察

2.1 いじめの定義問題

日本の教室におけるいじめの特徴を、欧米諸国との比較調査から実証的に検討した Kanetsuna, Smith, and Morita (2006)^(注3)によれば、日本では集団による関係性攻撃が使われることが多い。つまり、教室の大勢で無視したり、仲間外れにするなどの関係性攻撃がいじめだと捉えられていることが日本の教室のいじめの特徴である。また、いじめ被害者は、いじめられたことに対してしばしば自らの落ち度を反省したり、いじめの事実そのものを否定する傾向が見られる。これらを踏まえて考察すると、日本のいじめの特徴として、「見えないこと」、すなわち、いじめがいじめ関係者以外の者に可視化されにくいという点が浮かび上がる。いじめ被害者の自殺報道では、しばしば担任や学校関係者がいじめの事実を知らなかったことが取り上げられる。前掲の取手市立中学校のケースのように、教師や学校関係者の絶望的な鈍感さを感じてしまう事例も多いが、あながち担任の監督不行き届きのみで帰属できることではないのかもしれない。また、見えないことで、日本のいじめは更に悪化してきている部分があるとも考えられる。

日本におけるいじめの定義も、昭和 61 年度に文部省から出された「『いじめ』とは、①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実(関係児童生徒、いじめの内容等)を確認しているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないもの」

から、平成 25 年度の文部科学省による定義

「『いじめ』とは、『児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人間関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものも含む。)であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。』とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」

というふうに時代といじめの実態の変化に合わせて変遷してきている。しかし、日本の学校におけるいじめの「見えにくさ」は、どのようにいじめの定義を変えようとも変わっていないのである。

2.2 「いじめの原因」に関するアンケートの分析

それでは、「教職入門」の講座を受講している現代の大学生は、この「いじめ」問題についてどのような認識をもっているのか、授業の中で実施したアンケートを分析することにより探っていくことにする。

第 4 回の授業の最後に、次回の授業のテーマとして取り上げる「いじめ」に関する次の

ようなアンケートを実施した。アンケート方法としては、項目選択ではなく自由記述とした。

(質問) 小学校・中学校・高等学校を問わず、日本では「いじめ」問題が今もなくなりません。「いじめ」を苦にして不登校になったり、最悪の場合は若く尊い命が犠牲になってしまうケースさえあります。あなたは、「学校」において「いじめ」が起こる、そして、なかなかなくなる原因はどこにあると思いますか。(自由記述)

自由記述によるアンケートであったが、受講生全員のアンケートを分析していくと、大学生がいじめの原因と考える幾つかの「視点」が見えてきた。以下、アンケートに書かれていた主な内容を、その「視点」ごとに整理していくことにする。

(視点 1)「人間である以上いじめはなくなるしない」

学生	記 述 内 容 (抜粋)
A1	・人間という生き物は、誰かを下に見ないと生きていけない生き物だから減らないと思う。
B1	・私は人間の感情がなくなる限りなくなると思います。人間である以上、他人より優位に立ちたいとか、馬が合わない人が嫌いになってしまうのも自然のことだと思います。けれど、受け入れることはできなくても、理解することは不可能ではないと考えます。
C1	・僕は「人間」が存在する限りいじめはなくなるしないものだと思います。人が存在する限り、そこには大人も子供も関係なくいじめがある。悪い場合、いじめという事に気づかずいじめをしてしまっている場合もあると思います。でも減らすことは出来るのではないかと思います。
D1	・学校という社会から出れば、「いじめ」として行われているのはただの「犯罪行為」である。そして、その「犯罪行為」を楽しむ層の人間が一定数必ずいるから。
E1	・いじめはなくせない。人間の「性」。学校でなくても、子どもでなくても、大人でも、会社でもいじめはある。けど、学校でのいじめが大きく問題となるのは、子どもの精神が安定していない時期のせい。
F1	・いじめはこの先もなくなるしないと思います。いじめが起こる原因としては、多数派の意見に流されてしまうことだと思います。これは、小・中・高だけでなく、大人の方たちでも同じことが言えると思います。
G1	・まだ心も幼く、相手が何をしたら傷つくのかも分かっていない40人の子供達が集団になったら絶対にいじめは起きる。大人になっても起こるくらいだから仕方がない。
H1	・人はそれぞれ違う生き物である。そのことを理解していないため、いじめが起きる。なくなるしない。

I1	・言い方悪いかもしれないけど、正直人間だからいじめがあっても仕方ないと思います。でも、それを、どれだけ早く周りの人が気づき、どう対処していくかが大事だと思う。
----	---------------------------------------------------------------------------------

(視点2)「自分とは違う他人の個性を受け入れられない」

学生	記述内容（抜粋）
A2	・他人の「個性」を受け入れられないことが大きな原因だと思います。人間は、自分の理解できないことをしている人を警戒してしまう節があります。
B2	・私はいじめが起こる原因として、まず周りの人とその子が何か違うとか、話が合わないとか、その人の個性が嫌いなど、その人との違いを受け入れられないからいじめが起こるのだと思います。
C2	・いじめが起こるのは、人それぞれ違いがあるのに、それをばかにする人が必ずいるから。みんなが同じ考え、見た目人間ではないのに、それを認め合うことができないから「いじめ」がなくなる。
D2	・ノリを合わせない人をはぶく「グループ原理」があるから。
E2	・他とは違う個性をもった子が、「普通ではない」と認識されてしまうから。

(視点3)「いじめる側の理由と自覚のなさ」

学生	記述内容（抜粋）
A3	・人の悪口を言うことで自分が優位に立ったように感じるため、どんどんヒートアップしていく気がする。また、人の悪口を言って共感されると、どんどん「きらい」とか「うざい」の気持ちが大きくなってしまい、悪口だけでは収まらなくなるから。
B3	・いじめる側といじめられる側で明らかな上下関係が生じることで、いじめる人間は優越感を得てしまい、一度完成した上下関係はなかなか無くなるから。
C3	・子どもはそれぞれにストレスや不満を抱えていて、それらを発散したり、自分の方が上の立場であるという思い込みから生まれる優越感を求めることが、いじめにつながってしまっていると思う。
D3	・いじめる人は、自分が幸せじゃないから、人を不幸にして自分を上にしているんだと思う。
E3	・いじている側も心に弱い部分があって、いじめることで発散していることもあると思うので、そこを解決しないといけないと思います。
F3	・いじている側が、「いじている」という自覚がないからだと思います。「少し困らせてやろう」だったり、「少し距離を置こう」という悪ふざけの気持ちが行き過ぎてしまうんだと思います。
G3	・軽い悪ふざけが発展した結果。いじている側の罪の意識の低さ。
H3	・「いじめ」は悪いこととのイメージがあるが、いじている人に大きな罰が下る

	わけではないため、軽い気持ちで始めたものがどんどん重いいじめになってしま う。
--	--------------------------------------------

(視点4)「いじめられる側にも問題あり」

学生	記述内容（抜粋）
A4	・いじめはいじめる側もちろん悪いですが、確実にいじめられる側にもどこか しら原因があると思います。(中略) いじめられる人は、いじめる人に対して何か 不快な言動をしたからいじめられるんだと思います。(中略) いじめられる人が 最初の原因を作っているのだと思います。空気を読むというのはよくない言い方 かもしれませんが、ある程度人に合わせることをしなければ、嫌われるのも仕方 ないし、将来的に必ず失敗すると思います。
B4	・いじめる側も悪いけれども、いじめられる側にも原因があると思う。全てがい じめた側が悪いと決めつけるのではなく、いろんな人から話を聞いて情報を集め なくてはならない。
C4	・いじめる側にももちろん問題があるが、いじめられる側にも問題があると思う。 その問題に自分で気づくのは難しい。だから、いじめはなくなる。
D4	・いじめられる人に原因がある場合に、その子に対してどのように接していいの かがわからない。いじめの授業をする時の題材が大抵弱いものいじめである。そ うじゃなくて、嫌いな子にどう接すればよいか分かれれば改善されるのではな いか。

(視点5)「自分が標的にならないよう自分の身を守るため」

学生	記述内容（抜粋）
A5	・自分がいじめられたくないという思いから、いじめられている人を見ないふり をしたりしてしまう一人一人の心の弱さがあるから、「いじめ」がなくなる と思う。
B5	・誰かをいじめることで自分はいじめられなくなると思っていたり、周りの子も 先生などに言うと身の危険があるから。いじめを仕切っている子が権力を持っ ていて、生徒が何も逆らえなくて相談できないので先生が気づかない。
C5	・注意したら、自分もいじめられてしまうのではと考えて、周りの子も何も出来 ずにいることが多い。だから、いじめはなくなる。

(視点6)「教師の言動、教師の対応の在り方」

学生	記述内容（抜粋）
A6	・先生もいじめの原因、いじめる立場になっていることがある。
B6	・現在、「いじめ」が原因で自ら命を絶ってしまう生徒や不登校になってしまう 子が実際にいることを、もっと生徒が知れるように教師が伝えきれていないのが 「いじめ」がなくなる理由だと思います。

C6	・教師が多忙で生徒と向き合うことが出来ていない。
D6	・相談しやすい教師がいない。
E6	・先生の生徒への関心の低下も原因だと思う。教師になった理由が、安定して稼げる、教えることが好きということだけでなった先生には、いじめ問題を解決できないと思う。
F6	・先生が、その子にとってはいじめでも、それをいじめではないと考えてしまうのが原因の一つではないのかなと思いました。

(視点7)「雰囲気」

学生	記述内容（抜粋）
A7	・ある一人にとって気に入らないことがあると、それを周りの友達・クラスに広めて共有しようとしてしまう。そこで「一人対クラス」という雰囲気が出来てしまうため、相談できる相手が身近にいなくなってしまい、孤独になる。
B7	・日本の「当たり前」や「みんなと一緒に」「普通」という感覚が、いじめをさせることにつながっていると思う。当たり前や普通という言葉に定義はないのに、多数決で多い方が正しいかのような雰囲気を早くなくしていかなければならない。
C7	・いじめの原因は「空気」です。いじめの空気は「いじめ」という言葉を聞いたその時からまわりついでにきます。やっではないけないことなのは分かっていますが、「いじめ」が何のことをいうのか分からないから、無意識にしてしまうんだと思います。
D7	・学校には、いじめがあるものだという雰囲気が確実にあると思います。なので、先生はいじめを起こさない雰囲気をつくるのが大切だと思います。
E7	・なくならないのは、そういう雰囲気ができてしまっているから。いじめに関係ない人も、いじめられている人にはなかなか話しかけられないと思うし、教師はケースバイケースなので、どこまで首を突っ込んでいいのかわからない。
F7	・学校に行きたくないと思うのは、クラスの雰囲気が嫌だから。いじめている人だけじゃなくて、雰囲気に飲み込まれている人も、いじめられてる側からしたら、いじめている人のうちに入ります。雰囲気を支えてくれる友達がいれば、いじめを感じる人はいなくなる。よって、いじめはなくなると思います。

以上7つの視点以外にも、

- ・親の言動や家庭環境
- ・学校というシステムそのものの問題
- ・SNSの普及
- ・友達関係の悪化
- ・いじめられている子どもの居場所・逃げ場所がないこと
- ・生徒たちの「命」に対する意識の軽さ

・人の気持ちを考えることが出来ない子どもが育ってきている

など、10～15分程度の短時間のアンケートではあったが、受講生は自分のこれまでの学校教育の中で実際に見聞きした、あるいは経験してきた体験を基に真剣に回答してくれた。受講生は全員大学1年生であったが、将来教職を目指している学生ということもあり、日頃から教育問題に関心をもっており、ニュース等からも知識を得ていると思われる回答も多く見られた。本稿では紹介できないが、自身の「いじめられ体験」を通しての回答もあった。

紙幅の関係もあり、これらの視点全ての回答について分析することは出来ないが、この中で筆者が特に注目したいものが三点ある。それは、(視点1)の「人間である以上いじめはなくなる」と(視点4)の「いじめられる側にも問題あり」、そして(視点7)の「雰囲気」である。

まず、(視点1)の「人間である以上いじめはなくなる」についてであるが、A1「人間という生き物は、誰かを下に見ないと生きていけない生き物」、D1「犯罪行為を楽しむ層の人間が一定数必ずいる」、E1「いじめはなくせない。人間の『性』。」等に見られるように、この視点から回答した学生の中には、「性悪説」があるように感じられる。現代の社会における様々な世相を見聞する中で、残念ではあるが、学生がそのように感じるのには理解出来るところである。ただ、これらの学生の回答を最後まで読むと、「いじめ問題」が起こるのは仕方がないとは考えているが、その「いじめ問題」についての解決については決して諦めてはいない。C1「でも、減らすことは出来るのではないか」、I1「でも、それを、どれだけ早く周りの人が気づき、どう対処していくかが大事」など、その解決に向けての自分なりの方策を考えている回答を見ると、授業者としては嬉しく、また頼もしく思える。付記すれば、このアンケートは自由記述であったため複数の視点からの記述も多かったのであるが、この視点からの回答は16名(受講生105名)と最も多かった。

次に、(視点4)の「いじめられる側にも問題あり」との「被害者原因説」に立つ回答が8名と少なからずいたことである。これらの回答を見てみると、A4「いじめられる人が最初の原因を作っていると思います。」というような論調のものが殆どであった。つまり、いじめられる原因を被害者本人の特性に帰する考え方である。積極的にいじめに加担しているわけではなく、そのように認識している回答者も「いじめの人が悪い」と判断している。しかし、依然として、原因は被害者にあると考えているのだ。このタイプはそれほど悪意があるわけではない、むしろ被害者に同情さえするかもしれない。これは典型的な認識パターンであり、今回のアンケートからも学生の中に多く存在していることが分かる。しかし、それだけに始末が悪いと言える。なぜなら、このような認識が、いじめを温存させる基盤を形成していると思われるからである。見て見ぬふりをする傍観者を生み出す要因ともなっている。「被害者原因説」が根強い中で、「被害者には、いじめられてよい原因などないのだ」という認識に至ることの困難さは感じながらも、授業者である筆者からはこの点について授業の中で強く訴えた。さて、学生たちはどのように受け止めたのであろうか。

最後に、(視点7)の「雰囲気」についてであるが、この視点からの回答は、学生達自身が小学校から高等学校までの学校生活の中での実際の経験から導き出したものと思われる。A7「そこで『一人対クラス』という雰囲気が出来てしまう。」、C7「いじめの原因は『空気』です。」、F7「学校に行きたくないと思うのは、クラスの雰囲気が嫌だから。」など、「雰囲気」、「空気」という文言が随所に出てくる。また、F7「いじめている人だけじゃなくて、雰囲気に飲み込まれている人も、いじめられている側からしたら、いじめている人のうちに入ります。」と、この「雰囲気」がいじめを温存させている原因だと指摘している。

さて、この得体の知れない「雰囲気」・「空気」を変えるにはどうすればよいのか。これについても、その答えを学生達のアンケートの中に見出すことが出来る。D7「なので、先生はいじめを起こさない雰囲気をつくるのが大切だと思います。」、F7「雰囲気を支えてくれる友達がいれば、いじめを感じる人はいなくなる。」身近な人間によって引き起こされる「いじめ」であるが、それを解決することが出来るのは、やはり「身近な人間」以外なのである。学生達はそのように認識しているのだと筆者は受け止めた。

2.3 「いじめの解決策」に関するグループワークの実践より



図1 グループワークでまとめた発表資料①

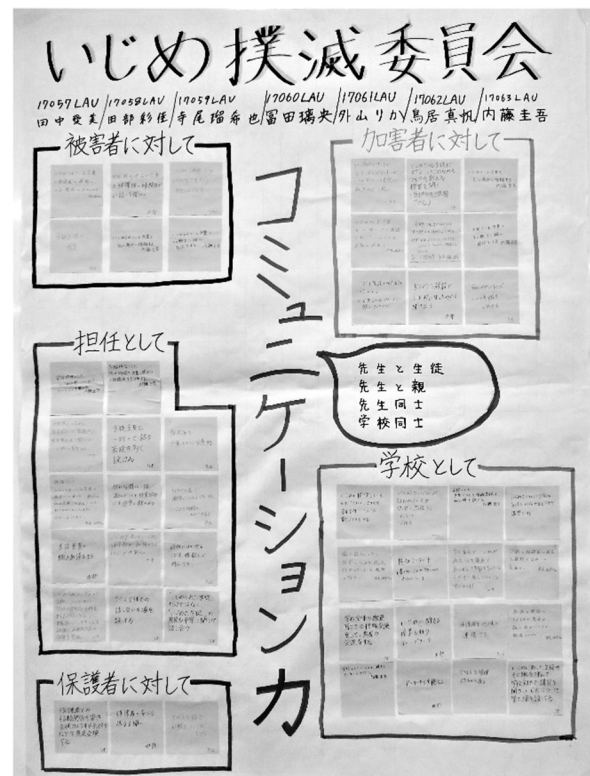


図2 グループワークでまとめた発表資料②

第5回の「いじめの原因を探る」をテーマにグループディスカッションを行った授業に続き、第6回・第7回では、「教師としていじめ問題とどう向き合うか」、「いじめ問題を解決するためにどのように対応するか」をテーマにグループディスカッションを行い、それを KJ 法(注4)を用いて模造紙にまとめていくグループワークを実施した。図1、図2、図

3は、教職入門の授業で受講生がグループワークによりまとめた発表資料の一部である。
この授業において筆者が与えた課題テーマは次の通りである。

(テーマ)平成 26 年度の文科省調査によると、いじめの認知件数は、小学校で 11,413 校 (55,5%)、中学校で 7,161 校(67,5%)でした。前回のアンケートでは、「人間である以上いじめが発生するのは仕方がない。」との意見も複数あったのですが、いじめに苦しむ児童生徒がいることが分かれば、人間として何とかその児童生徒をいじめの苦しみから助け出してあげたいと思います。

将来教師になって、自分の学級に「いじめられている児童」がいることに気づいた時、あなたはその「いじめ」とどのように向き合いますか。また、その「いじめ問題」を解決するために、どのように対応しますか。

《視点》・「いじめられている児童」に対して

- ・「いじめている児童」に対して
- ・学級担任として(他の児童への指導 等)
- ・学校として
- ・保護者に対して
- ・その他

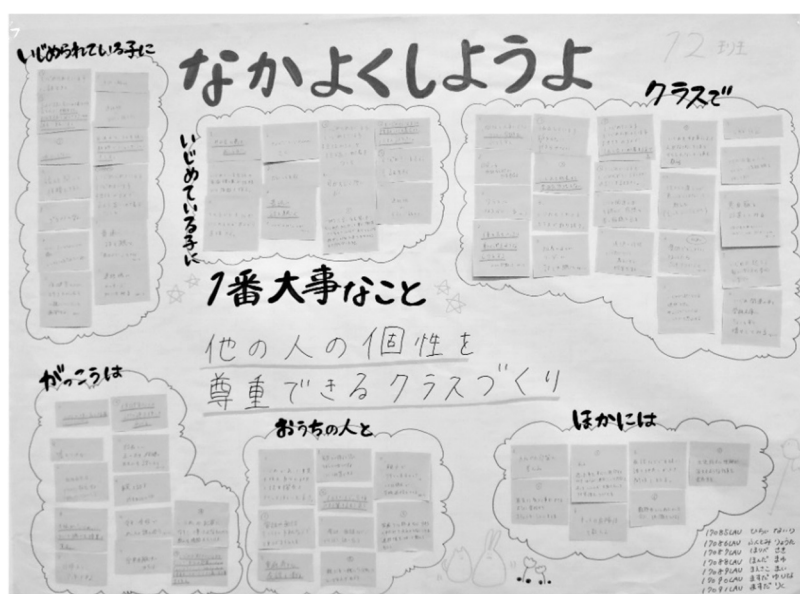


図3 グループワークでまとめた発表資料③

KJ 法によるグループワークにおいては、まず受講生全員に大きめの付箋紙を多めに渡し、先のグループワークの各視点について、一人一人思いつく限り自分の考えをメモ書きしていく。全員が書き終わったら、次に全員の考えや意見を視点ごとに整理していく。更に、一つの視点の中でもその内容によって更に細かくグルーピングをしていくことにより、新たなアイデアや意味を発見していく方法で取り組ませた。そして、最後に全体を見返しながら、最も大事だと思われることをグループディスカッションにより焦点化して作業は終わりとなる。

このグループワークは第6回と第7回の授業の前半を使って実施し、第7回の後半に、

各グループによる発表及び質疑・応答を行った。KJ法のグループワークとしては、決して十分な時間ではなかったと思われるが、各グループの課題に取り組む集中力は素晴らしく、真剣に議論している姿、そして真剣な中にもこの活動を楽しんでいる様子が見られた。各グループによるまとめ方にもそれぞれ工夫が認められ、発表会も熱を帯びたものとなった。

もっとも、いじめ問題を解決する具体的な方法として出された意見としては、学校教育現場にいた筆者からすると、「普段から子どもとのコミュニケーションを図る」等、どれも想定内の回答であり、予想していなかったようなものはなかった。しかし、授業のねらいである、学生達自身で考えて答えを見つけようとする意識作りは十分達成出来たと考える。

3 おわりに

本講座「教職入門」で取り上げたテーマは、本稿の「いじめ」問題に限らず、全て明解な解答がないものばかりである。数年後、受講生の多くが教師として、その解答のない問題と向き合うことになる。何故解答がないのか。それは、「いじめ問題」と言っても、ケースごとに状況が異なるからである。筆者も小学校において長年教員として働いてきたが、その間に対応した「いじめ問題」も、全く同じ状況のものは一つもない。当然、対応の在り方もそれぞれ異なってくる。どのような対応が最もよいのかは、自分で考えるしかない。その際に最も大切なことを一つだけ挙げるとすれば、それは、その「いじめ問題」に対して、教師が本気でなくしたいと思っているということ、いじている本人にも、いじめられている子どもにも、そして保護者にも何としてでも伝わるよう努力することである。本講座では、グループディスカッション、グループワーク、ディベート等、常に受講生に考えさせながら授業を進めていった。受講している学生たちが、解答のない様々な教育問題について本気で議論している姿は、とても頼もしく筆者の目に映った。

「いじめ問題」の解決は、確かに難しい。日本文化では、多くの人々がそれぞれ所属する関係性から離脱することが稀であるため、身近な他者から疎外された場合、その疎外の後に新しい関係を構築することが難しく、結果として疎外のもたらす否定的な結果は非常に大きいものとなる。このことを、繰り返す日常で学習した日本人は、次第に関係から拒絶されることを未然に防ごうとする。仮に拒絶が生じた場合、まずは自分が悪かったのかと反省したり、あるいは、拒絶はなかったものとして事実を否定したりする場合もある。このように、自己反省や葛藤回避を未然に行い、拒絶に敏感である人々が多く存在することで、逆説的ではあるが排除の危険と隣り合わせであるという、まさにそのことによって現在の関係がより保守的、長期的、安定的に維持されてしまうのかもしれない。本講座の最後に、この「教職入門」の授業の感想をアンケートに書いてもらったのであるが、その中の幾つかを紹介したい。

・「この授業の話し合いの内容は、正しい答えがあるものではない。それでも、自分と違う意見を聞くことで、自分の考えだけが正しいということではないことが分かったし、新たな発見があった。他の意見を聞いて取り入れることで、自分の視野も広がった。」

・「グループワークを行うことで、色々な視点からいじめへの向き合い方を知ることができ、自分だけでは思い浮かばない案もあったので、貴重な経験であったと思います。教員を目指す上で心掛けなければならないこと、知識を多くこの授業で得ることが出来ました。」

・「特に印象に残ったのは『体罰』についてのディベートの授業です。一見、『体罰は悪いこと』だと思いがちだが、それをあえて賛成と反対に分かれてディベートを行うことで両方の意見を知ることができたし、そういう考え方もあるんだと新しい発見をすることもできた。」

・「教職入門でやってきたことは、本当に自分のためになるようなことばかりで、自分は教師を目指しているんだなと毎時間思い知らされました。」

・「いじめや体罰などの問題は、今はテレビニュースなどでも多く取り上げられているため耳にすることも多いが、具体的にどのような対応をするべきかということには触れられていない。今回の授業でどうするべきかについて学べたのでよかったです。」

・「この『教職入門』での授業を通して学んだことを、今後の自分の目指す教師像に結びつけて、教育についてより深く学んでいきたい。」

・「毎回、授業のはじめにやった学級遊びが楽しかったが、それはただ楽しく遊ぶだけのものではなく、クラスの様子を知る、生徒間の様子を知ることができるものだと学びました。教師になった時に取り入れていきたいと思いました。」

授業者としては、教師に向けての第一歩を歩み出した学生達からの大変嬉しいメッセージである。今回、教員採用試験集団面接演習も授業に取り入れた。三年後の教職実践演習では、再度本格的な面接演習で本講義を受講している学生たちと会うことになる。成長した学生達とまた、教職に関する授業で会えるその時を楽しみにしながら本稿を終わりたい。

注

(1) Ellen Key, 小野寺 信訳：『児童の世紀』, 富山房百科文庫, 1979, pp.156-157

(2) フレデリック・バック：文部省選定環境教育・人間教育ビデオ『木を植えた男』, 光村教育図書株式会社, 1982

(3) Kanetsuna, Smith, and Morita :『Coping with bullying at school : Children's recommended strategies and attitude to schoolbased intervention in England and Japan. Aggressive Behavior, 32, 2006, pp.570-580

(4) KJ 法とは、一見まとめようもない複数の多様な情報や意見を、類似性や共通性のあるもの毎にグループ化（統合化）をし、これを繰り返すことで新たなアイデアや意味を発見する方法。『KJ』とは、考案者である文化人類学者 川喜田二郎のイニシャルによるものである。